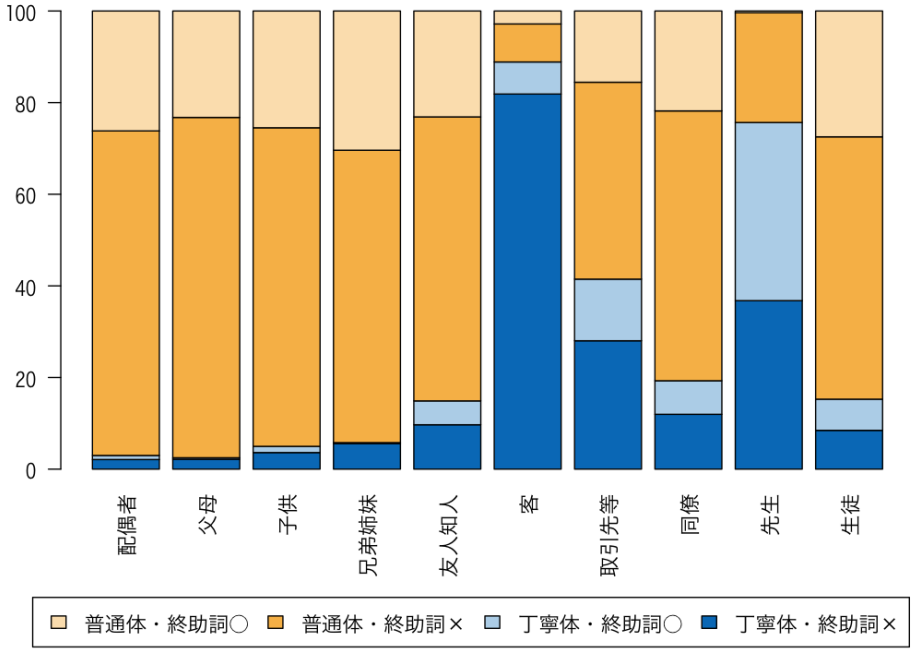
日常会話コーパスに見るモダリティの多様性

小磯花絵（国立国語研究所）

本発表では、日常会話コーパスを対象とする分析を通して、私たちが普段の生活の中で聞き手との関係性や場面などに応じて丁寧さのモダリティ・対人のモダリティを多彩に使い分けている実態を描き出す。

分析対象とするのは、2018 年 12 月 4 日にモニター公開した『日本語日常会話コーパス』（CEJC モニター版）である。CEJC モニター版には、性別・年齢などの観点からバランスを考慮して選別された協力者 20 名が、日常生活で自然に生じる会話を協力者自身に記録してもらうという方法で集めた 50 時間分の会話（116 会話、延べ 476 名、異なり 291 名）が収められている。述語を動詞・形容詞とする約 35,000 発話を対象に、丁寧さのモダリティ「です」「ます」の有無、および対人のモダリティーに関わる終助詞（「ね」「よ」「ぞ」「ぜ」を対象）の有無により、各発話を、①丁寧体・（対人モダリティの）終助詞なし、②普通体・終助詞あり、③普通体・終助詞なし、④普通体・終助詞ありに分類した。その上で、相手との関係性や場面などとの関係から、これらがどのように使い分けられているかを調べた。

結果の一部を図に示す。図から、発話の相手が「家族」「友人知人」「生徒」の場合と比べ、「客」や「先生」の場合には、圧倒的に丁寧さのモダリティが多く用いられているが、「客」よりも「先生」の場合の方が「ね」などの対人モダリティが多く用いられていることが分かる。丁寧体に終助詞「ね」「よ」が付くと親しみは増すが丁寧さの度合は低下することが指摘されているが（益岡 1991）、先生に対しては丁寧さの中にも親しみを込めて、客に対しては丁寧さを維持して、発話している様子が見えてくる。



発表では、こうした全体的な傾向に加え、何名かの協力者に焦点をあて、相手や場面によって協力者がモダリティをどのように使い分けているかを具体的に見ていく。